

論文内容の要旨

専攻名	多文化社会学 専攻	氏名	黄毅
題名	中国社会における「喪文化」と若者の行為主体性についての考察 -自己実現と無力感が混在する若者文化-		
<p>本研究の目的は、「喪文化」を事例に、中国の若者の主体性と「喪文化」との関係を明らかにすることである。中国における「喪文化」現象について、中国の若者の行為主体性と社会意識を考察した。研究対象は、1990年代以後に中国で生まれた、ホワイトカラー層と大学生を主な対象としている（略称・「90後」）。ギデンズの理論を枠組みに参考して、行為主体と社会構造が相互に影響し合うプロセスのなかで、90後の若者の行為主体の特性を確認した。</p> <p>ギデンズによれば、行為主体性は、行為者が「行為の流れの再帰的監視を通して、社会的世界に因果的に介入していくプロセス」である。したがって、「喪文化」の担い手である若者の行為主体性に関して、次の二つの問いを設定した。①「喪文化」という、若者による行為の実践は社会にどのような影響を与えているのか、②「喪文化」は中国社会の構造とどのような関係にあるのか。この二つの問題認識に基づき、「喪文化」を事例に、現代中国の社会制度のなかに、埋め込まれた若者主体の特性について分析し、「喪文化」は、中国の現代化に伴う社会構造の変化に対する「90後」の若者の主体性を表明する新しい形式であるという仮説的な命題を呈示した。</p> <p>本論文では、上記の命題に対し、質的分析を実施した。SNSの「喪文化」に関する投稿内容を調査し若者の行為主体の特性を抽出した。具体的には、投稿内容の背後に隠れている若者の主体性の所在を、中国の社会構造と照らし合わせながら確認した。そのうえで、中国における「人民日報」、「光明日報」など主流のメディアが、「喪文化」と、SNS上の「喪文化」に関する話題を、どのように解説し報じたのかについて補完的に分析し、公的メディア報道とSNS上のネットユーザーの投稿記事を比較した。さらに量的分析の結果を考察した。2016～2019年の4年間に投稿数変化から、「喪文化」のなかの若者の行為主体性についての特徴を明らかにし、若者の社会意識の変化を予測した。</p> <p>本論文は四章で構成している。第一章では、「喪文化」の参照軸として1960年代にアメリカを中心に世界に拡大したカウンターカルチャーと、戦後日本の若者論を比較考察した。これにより、「喪文化」の差別的な特徴を明らかにした。第二章では、「喪文化」は中国社会の構造との関わりについて考察し、「喪文化」担い手である90後の世代の特徴を整理した。第三章、四章では、ギデンズの構造化理論により、「喪文化」のなかの若者の行為主体の四つの特性を分析し、公的メディアの論考およびWeChatの投稿を分析した。これらの考察により、「喪文化」の担い手に象徴される中国の若者が新たな文化を創造し続ける可能性</p>			

があるといえる。彼らは将来の可能性を意識し、自己実現の在り方を従来の物質主義から自己の内面世界を充足することに転換している。このことは、「無力感」と「自己省察」の混在する調査結果が示唆している、と結論づけた。